

01.『目覚めた森で、エルフさんにおならで介抱される』

[とある深い森の中で...]

[鳥のさえずりと、小川のせせらぎが聞こえている]
お目覚めになりましたか...?
ここは森のはずれの、泉のほとり。
わたくししか知らない、秘密の場所。
あなたがここで眠っていたのは、森が運んでくれたから。
あなたがこうして目を覚ましたのは、こもれびがまぶたをなでたから...。
...ああ、無理をなさらないで。
旅人様の体はいま、ひどく傷つき、疲れ果てています。
村を襲った魔のものたちは、おかげで無事、退けることができました。
いまは何も案ずることなく、ただゆっくりと、お休みください...。
申し遅れました...わたくしはメナリ。
この森に暮らす、森人の末裔。
人間の呼び名を借りるのならば...エルフと言えば、おわかりでしょうか。
わたくしが参りましたのは、他でもない、あなた様のため。
これより『姫隠れの儀』をとりおこない...
わたくしメナリの身をもって、その傷と痛みを癒やしましよう...。
緊張なさる必要はございません。
どうかわたくしに、お任せください...。
さあ、まずはお体の力を抜いて...それから、目を閉じて。
ゆっくりと、深呼吸しましょう。
鼻から大きく息を吸って...口から、吐いて...。
すうー...はあー...。
わかりますか？森の匂いが。
木々と、土と、こもれびの香り。
澄みきった森の、朝の空気。
すうー...はあー...。
そうです、そのまま...。
んつ...。

[空気の抜けるような、かすかな音が聞こえる] (04分19秒~)

ふう...。
さあ、ゆっくりと、息を吸って...吐いて...。
いかがですか？
雨後に香る、朽ち木のような...。
茹でたタマゴを、割ったような...。
わたくしの匂いが、わかりますか？
どうぞ目を、お開けください。
苦しくはありませんか？
めまいなど、ございませんか？
よかったです。
それではそのまま呼吸を乱さず...。
わたくしが三つ数えたら、ゆっくりとお体を起こしてみてください。
よろしいですか？いきますよ...?
いち、にの、さん...。
いかがですか？
先程よりもいくばくか、お体に力が戻られましたか？
ふふっ...いきなりのことで、驚かせてしまったかもしれませんね。
ごめんなさい。
けれどこれが、わたくしの一族に伝わる、癒やしの儀式...
『姫隠れの儀』なのでございます。
われわれエルフのおとめは元来、その身にマナを宿すもの。
それはほんらい不浄とともに、体の外へと放たれて、土や木々を育んでゆく...。
この儀式では、健康な娘が巫女となり、
床に伏したものへと向けて、腹にたたえたマナをかぐわす...。

そうやって、心や体に傷を負ったものに、森の命を分け与える。

今となっては忘れ去られた、いにしえよりの癒やし魔法....。

旅人様。森の恩人たるあなた様には、もはや感謝をしてもし尽くせません。

同胞たちを代表し、この身を尽くし奉仕させていただきたく存じます。

しかしながら、もし...

もし、わたくしのかぐわすマナの香りが、お体に合わないようでしたら....

お気に召さないようでしたら...

そのときは遠慮などなさらずに、すぐにおっしゃってくださいね？

...ふふつ。お心遣い、感謝いたします....。

それではゆっくりと、呼吸を続けて...そう、そのまま....。

いきますよ...よろしいですか？

...ん。

〔控えめな音とともに、エルフの腹のなかの香りが放たれる〕 (07分51秒～)

はあ....。

吸って...吐いて....。

最初は無理をなさらずに、ゆっくりと呼吸を繰り返して....。

わかりますか？

森にただよう、マナの香りが。

...ふふ。わたくしの匂い、お嫌いではありませんか？

よかったです....。

それでは、わたくしが三つ数えましたら、今度はゆっくりと立ち上がってみてください。

...ご安心ください、わたくしもお体を支えます。

よろしいですか？いきますよ....？

いち、にの、さん...よい、しょ。

すん、すん....。

はあ...旅人様の首元、不思議な匂いがいたします。

鉄と煙と...それから汗。

この森のものではない匂い。

けれどなぜだか、落ち着く匂い....。

どうぞ、わたくしの手をお取りになって？

そのままこちらへ、お手を伸ばして...

わたくしの体に、触れなさいください。

ふふ、ためらわれることなどありません。

わたくしがお手を、導いてさしあげます....。

頬。首筋。鎖骨。

ひとつひとつ、確かめるように....。

乳房。腹。太もも。

そうです。どうぞ両腕を体に回して....。

お尻。腰。背中。

このままわたくしと、お体を合わせて。

真正面からぴったりと....。

胸と胸が、触れあうくらいに。

お腹とお腹が、接するくらいに....。

...ふふ、旅人様。

そのように腰を引かずとも、構いませんよ....？

遠慮なさる必要はございません。

熱く、硬く...屹立されていらっしゃるのですね？

承知しております。

それは、あなた様のせいではない...わたくしが、そうさせたまでのことで。

わたくしの放った香りには、森の命がしみこんでいる....。

そこが熱く脈打っているのは、力が戻りつつある証拠....。

旅人様。

どうか今だけはしがらみを忘れ...このわたくしを、お使いください....。

ふふつ、そう...ぴったりとお体を合わせて。

わたくしの腰に、腕を回して。

まずは呼吸を、整えましょうか。

大きく息を吸って...吐いて....。

わたくしの体温を、感じますか…？

わたくしも、旅人様の熱くて硬いもの…腹のところに、感じます。

へそのちょうど、下のところ…。

どんどん硬さを増してゆく、あなた様の先っぽが、

わたくしの腹をやわらかく押して…。

つ…。

[ごぼぼ、と下腹部の震える感触が、へそに押し付けられたペニスを伝う]

くすぐす…。

やだ…♡

そこに直接、伝わってしましたか？

わたくしの腹が、動く音…。

はい。また、出そうです…。

よろしいですか？それでは、このまま…。

んっ…。

[静かな音とともに、エルフのおならが森に放たれる] (13分41秒～)

んふ…。

ふふつ…お分かりに、なりましたか？

腹がわずかに、へこんだのが。

わたくしの体の内から外へ…マナが放たれていったのが。

さあ、お鼻からゆっくりと息を吸って…お口から、吐いて…。

すうー…はあー…。

…んっ。

[熱くて長いすかし屁が、森の空気のなかに搅拌されていく] (14分23秒～)

ふー…。

熱い釜で煮た、ダイコンの香り。

やわらかく積もった、土の香り。

そう。これが…。

わたくしの香り…。